



東九州支部報



青少年体験登山大会(7月25日)・牧ノ戸峠にて

朝七時に大分駅前を出発した貸し切りバス組は牧ノ戸峠に八時四十五分頃に到着した。現地集合の人たちと合流して参加者は総勢二八名である。牧ノ戸レストハウスは改築工

と熱中症にならなずに楽しんだ

(のんびり組) 長野珪子

部員に当日の報告をお願いした。

東九州支部の夏の恒例行事となっている青少年体験登山大会。今年には去る七月二十五日(日)、夏休みに入って最初の日曜日、九重連山の久住山を中心に行われた。この日程と場所も第二回大会以来の恒例だ。

二〇一〇年一二月に、国際登山年を記念して青少年に山登りの楽しさ、面白さを体験してもらおうと、竹田市の越敷岳・緩木岳で実施して以来今年で九回目を迎える。

この日、登山口の牧ノ戸峠に集まった参加者は二八名で、例年に比べて少なめである。それに、青少年の姿も例年より少なかったが、年齢を問わず初心者も含めて一般参加者を募り、登山の体験してもらおうという趣旨で始めた大会であり、今回も高齢者の参加の方が目を引いた。

参加者を、本人の申告で「健脚組」「元氣組」「のんびり組」と三つの隊に分けて、「健脚組」は天狗、中岳、久住山のコース、「元氣組」は星生山を経て久住山のコース、「のんびり組」久住山だけという、これも近年恒例の班編成とコース設定である。以下「のんびり組」に参加した長野支部員に当日の報告をお願いした。

第九回青少年体験登山大会 久住山で山登り体験を

《 も く じ 》	
第9回青少年体験登山大会	1
九重遭難碑慰霊登山	3
国見岳	4
山に入って思うこと ペンリレー②	5
両子山	5
キリマンジャロ登山と サファリの旅①	7
私の無名山ガイドブック	43
9	
支部報編集者会議・ 支部活性化会議	10
お知らせ	10
後記	11



久住山頂にて (のんびり組と元気組)

九時過ぎに牧ノ戸峠を出発、セメント坂道をゆつくり登り、最初の東屋で小休止。沓掛山までは一般登山者に道を譲ったり譲られたりして、下りの梯子は特に慎重に。九時五〇分頃、沓掛山を過ぎて歩きやすい山道になった。この日は私たちの他にも一般登山者が多く、バラバラとなってもピクニックのおかげで居場所が分つて良かったと思う。西千里浜からは何回かの休

息を取って、星生山に登っている元気組の人たちの姿を追ったり、ウツボグサ、コバノギボウシ、イタドリ、ワレモコウ、シモツケンウなどの花々を觀賞したりして、久住別れ下の非難小屋広場に十一時十五分着。今回の子供さんの参加は、お父さんと一緒に参加の中村裕君(荷揚町小五年生)と裕次郎ちゃん(四歳)の兄弟二人のみ。弟思いの裕君は花の写真を熱心に撮っていたが、名前が分つたかな。裕次郎ちゃんは歩きにくい場所だけはお父さんの背負子に乗っけてもらったけど、長い距離をよく歩いたね。梅雨明け後の天候はいっぺんも暑くなり、連日熱中症に注意の生活だったがこの日はうす雲で、心配したような強い日射しがなく、久住別れの避難小屋前の広場では殊に涼しい風が舞っていて心地良く、一足早く秋の気配を感じた。広場で思い思いの休憩を取り、一般登山者に紛れ込むような形で急坂の大小石のガラ場を頂上に向かう。頂上一番乗りは十一時五十分頃、中村家の親子三人と見えた。山頂にはトンボや羽の縁に青色がついた綺麗な蝶が飛び、中岳方向を見れば、小高い丘の上は何人かが黙禱しているようなシルエットが見えたのは、健脚組が復活した遭難碑のところに居るらしい。

元気組のメンバーも山頂に着き、真新しい山頂標識柱の前で元



久住山頂にて (健脚組と元気組)

久住別れの非難小屋広場で、休憩を終え次第順次に出発し、下山ということもあつてか話の花がにぎやかだ。毎年登っているという地元小学校の先生、生徒(三四人)も楽しそうに下山していた。一四時二〇分頃、沓掛山の手前に差し掛かったところから空模様がおかしくなり始め、時折り雷鳴も遠くに聞こえていたが、木の階段を下りる頃から稲光も見え出し、一〇分後には頻りに雷鳴が聞こえるようになった。東屋にいた人たちの悲鳴が聞こえたが、何処かに落雷した？見ると筋湯の方角で稲光りは間を置かず闇をつんざくばかりに真横に走

中で、その前の石段の所で全員の写真撮影をした。今回の参加者は例年よりもやや少なかつたようだ。

(一)三組に分かれて出発
出発順に、健脚組(九人)は中岳、池の小屋、御池、遭難碑を巡って久住山へ。リーダーは加藤英彦会員。元気組(六人)は星生

山を経て久住山へ。リーダーは飯田勝之会員。のんびり組(十一人)は久住山のみ。リーダーは西孝子会員。

(二)のんびり組の頂上まで
組ごとに緑色、黄色、ピンク色のリボンを帽子に留め付けたが、目立って良かったと思う。

山頂にて (健脚組と元気組)

雷さまは怖い)

雷さまは怖い)

雷さまは怖い)

ったり、天を突き抜けるばかりに一直線にかけ上がったりと、私は珍しいとは思ふものの、すぐ近くでバリバリと雷鳴が聞こえると、もう怖い一言で、早く牧ノ戸峠に着きたいばかりの思いだった。最後には天体ショーのおまけまで付けてくれた体験登山だった。三時四〇分頃までには全員が無事下山し何よりであった。

(四) 帰りのバスの中で

さっそく各自が前に出ての自己紹介となり、往きのバスで、海の日はあるのに山の日がないということから、山の日をいつに設定したらいいか意見を求められていたため、ある人はそのことばかりを考えて歩いてきた等と皆を笑わせた。六月は祝日が無いので久住山大船山の山開きの日にしたら等貴重な意見が発表された。

また、周りの人から強制されて英語で自己紹介した下川(智)さんや、家をリフォームして、風呂も新しくなったので遊びに来てくださいと言った飯田(ひ)さんにはやんやの喝采。自己紹介は盛り上がっていった。

唯一の子供さん参加者で中村兄の裕君は堂々として、初めは山は怖いと思っていただけ、そんな事はなかったと話し、弟の裕次郎くんは、ありがとうと言った。また事務局から、山と歌(広島高師の山男の歌)の歌詞が配られ加藤さんの指導で合唱した。

皆、今日の体験登山大会を楽し

み、達成感に満たされた笑顔での帰路となった。

(五) 終わりに

今回登って気づいたのが、ゴミが落ちてなかったこと。登山道が歩きやすくなった所。新しいロープを張った所。標識が新しくなったり分りやすくなった所。山を守って大変な作業をしてくれた多くの人たちに深く感謝します。



月例山行報告

九重遭難碑慰霊登山

(八月月例山行報告)

加藤英彦

当初の八月の月例山行は英彦山を予定していたが、支部報五〇号に変更のお知らせを記載したとおり、「九重山、初の遭難事故より八〇年」の慰霊登山をすることとし、当日八時に牧ノ戸峠集合とした。

しかし、その遭難当事者たち二名がその時に登った道を忠実に登って遭難碑まで行こうという発案があり、それに賛同した約六人のメンバーは、七時に登山口の久住展望台に集まり、本山登山道を登った。

当日牧ノ戸峠から出発する頃は天気も良く、遭難碑の現地に十一時集合ということで登っていったところが、久住別れを過ぎた頃より前方の高台の方から霧がかかってきた。天候が、高度を増すにつれて悪化してきたのだ。それでも、御池の西側の1748mのピーク上にある遭難碑の前には各方面からの参加者が次々と到着してきた。

セレモニーの準備にとりかかる

(遭難碑)



頃より、それまで霧をふくんだ強い風が霏雨をふくむようになり、しかも次第に雨粒が大きくなってきた。とりあえず碑の前に集まってはみたが、ますます雨風が強くなり、何とか写真だけで撮って、慰霊祭の場所を急遽、下の避難小屋の中に移すことにした。石室のこの小屋は倒壊寸前になっていたが、去年十一月、大分森林管理事務所などのあ補修したばかりだ。

十一時過ぎ、約六〇名の参列者で超満員となった小さな避難小屋の中で慰霊祭が始まった。司会を九重の自然を守る会の船津理事、主権者あいさつ、経過報告、そして法華院白水寺の第二十六代院主、広蔵岳久氏の読経、全員焼香。その後、碑文の口語訳と解説、遭

難したうちの一人、渡辺邦彦さんの実弟の渡辺道夫さん(福岡県直

(読経する広蔵氏)



方市在住、八一歳)から届けられた弔辞を代読して慰霊祭のセレモニーを終了した。外は折りからの冷たい雨と風で、小屋の中までみんな寒さに震えながらであったが、暗い石室の中で、ライトを照らしながらも厳かな行事はとどこおりに終った。

遭難よりちょうど八〇年目となった節目の年、慰霊登山を呼びかけたところ、約六〇名の山仲間たちが集まってくれた。若くして逝った二人の冥福を祈るとともに、あらためて山での遭難ということを考え、自覚しながら自ら警鐘を鳴らす良い機会となった。

この日の雨は、亡くなった二人の涙雨であったようで、また、参

(祭壇のようす)



国見山

(1738.8m)

(九月月例山行報告)

久保洋一

今月の山は熊本県の最高峰、国見岳です。これは宮崎県の耳川、熊本県の緑川、川辺川の源流です。登山コースもちよつとマイナーなルートで、五家荘の葉木の奥から平家山経由です。

加した人々には山を甘く見てはいけないという戒めを、あらためてしみこまれたようにもあつた。下山途中では雨も上がり、牧ノ戸峠では薄日も射すという不思議な天気であつた。

なお、この件については日本山岳会本部発行の『山』の九月号(NO七八四)にも詳細報告が掲載されているのでご覧下さい。

参加者：首藤、加藤、飯田、後藤(実)、佐藤(善)、下川、西、中野、石川、遠江、日向、塩月、渡辺(昭) (支部関係者のみ)

登山口に着いた時、やっと目を開けて車の外を見たのだった。天気は曇りだ。これでは今日の登山はパスしなければだめだろうと思

っていたが、なんとなく車から降りて登山靴の紐を締め直し出発の準備を始める。悲しい性だ。

八時三出發。最初はふらふらした感じだったが外の新鮮な空気を吸いながら歩いていくと、徐々に復調してきた。谷に下り、谷沿いに迂回しながら二ヶ所沢を渡り、植林帯を尾根伝いに登っていく。かなり急な登りだ。尾根にかかった頃から降り出した雨は、植林地から自然林に変わる頃、本格的に雨が降ってきたので急遽雨具を着ける。雨の中を再び出発。今日の天気は一日中こんな調子だろう。登山口から一時間四〇分で平家山山頂に到着。そのころは雨が上がつていた。山頂は眺望がきかない。朴の木が二本青々とした大きな葉

(平家山山頂にて)



をどころ狭しと広げていた。平家山までの登山道は一ヶ所分岐点が

ありそこを間違えなければしつかりした踏み跡があり迷うことはない。林業関係者が下刈り作業をしていて、その直後だったらしく、これが幸いして快適だった。

平家山からは稜線歩きだ。多少のアップダウンはあつたがこの稜線もヤブはほとんどなく、目印のテープもかなりあつて、二、三ヶ所迷いそうなるころもあつたがほとんど問題はなかつた。以前は猛烈なスズタケのブツシュで覆われて、踏みあともほとんどなかつたというが、そのスズタケは稜線部にわずかに残るだけで、ほとんど枯れてしまい、遠くまで見とおせる。

平家山から国見岳への稜線の中頃だったか、動物のうなる声が「うー」と聞こえ気持ちは悪かつた。野犬なのだろうか？一人だとちよつと怖かつただろう。稜線をかなり進み、やや展望の開けたところで一休み。左手に遠く高岳と天山山が見えるが、右手に見えるはずという国見岳は雲の中で、その姿さえ見えない。周りの山が見渡せたのはこのときが最後だったように思う。

あとは天気が悪くなる一方で、途中から小雨で雨具をつけたり、はずしたり・・・国見岳山頂手前の急登あたりでは暑くて雨具と脱ぐ。平家山から約二時間四〇分かけて、国見岳山頂に一一時四〇分頃着いたときも周りは全く見えなかつた。本来なら周囲の山が全て見渡せるはずなのに残念だ。山頂

にはまだ真新しい祠があつた。昨年五月の脊梁全山縦走中は、この山頂の祠を新設中で、日向市から来たという宮大工が二人で営造中であつた。

(国見岳山頂にて)



山頂で記念撮影をしてお昼の食事を済ませたが、動かないでいると体が冷えて寒かつたので、一一時二〇分過ぎには早々に下山開始。帰りは空模様も悪くなりそうなので急ぎ足だ。そして一四時四〇分、平家山到着。そこでひと休みしているとまたパラパラと降り出したので急いで下山開始。下りはじめたらいよいよ本降りとなり、途中で皆、脱いで雨具を着けて足早に下山。急な滑りやすい道を気を付けながらも走るような下山だ。そして、三時五五分、登山口に着いた。ちなみに下りの所要時間

は国見岳から平家山が約二時二〇分間、平家山から登山口が約一時間だった。本日の全歩行距離は一五km以上に及んだ。以上九月の中野、牧野、遠江、参加者：星子、西、飯田、久保、

アラベスク・ペンリレー(第二回)

支部報発刊五〇号記念企画

山には入って歩きたい

首藤 宏史

最近、祖母・傾やくじゅう山系に登りながら、この五〇年近くで山の様相が変わり、川の水量が少なくなったと感じることが多い。

傾山では、スズタケが大部分枯れ、三尾あたりのようすが大きくかわってきた。以前はスズタケの中を掻き分けるようにして歩いていたのだが、林間が見通せ、全く違うところを歩いているようである。三坊主コースもしかり。官行コースも清水小屋跡から三尾までの登山道もスズタケが枯れてしまい、かえて道がわかりにくくなり、尾根筋まで適当に歩くことができ、下りに迷ってしまいそうである。これと関わりがあるのか、ブナの立ち枯れが目につくようになったし、アケボノツツジの立ち枯れも目立ち、山頂付近が荒れてきて、山全体が勢いなくなっているようである。

ずっと前から、三重町大白谷、宇目町西山、宮崎県日之影町見立、緒方町九折と傾山を取り巻く山腹の自然林(原生林)が伐り込まれ、その後保水力のない杉を植え、山全体で水の保水力がなくなったからであろうか？沢の水量も少なく、緑豊かな山とは言えなくなりつつあり、寂しい限りである。祖母山の方はまだ緑に勢いがある。

くじゅう山系では、ノリウツギが勢いを増し、ミヤマキリシマやコケモモなどがの生育が脅かされている。大船山付近のミヤマキリシマは、ほとんど見られなくなり、段原や北大船から大戸越にかけても危機的状況である。昔は段原に登り着いて見渡したとき、ミヤマキリシマの原だったが、いまはノリウツギの林(?)で、全く見渡すことができない。また、久住山頂や稲星山の南斜面も同じくノリウツギに占領されつつあり、二、三〇年前から大きく変わってきた。

平治岳もだんだん変わってきたが、山頂付近のミヤマキリシマはまだ見られる。扇ヶ鼻、肥前ヶ城、星生山も含め、人手も加えた保護活動をするなら今のうちだと思うが、国立公園内の樹木の伐採は規制があって、前に進まない。また、中岳、天狗ヶ城付近のコケモモも圧迫されつつある。坊ヶつるの草丈ものび、昔はしゃがんだとき、頭が出る位だったが、今は完全に隠れてしまう。タデ原の草丈ものびた。温暖化によるものであろうか。

高いところに植えた杉を伐採して、自然林の再生を促したり、ミヤマキリシマ等の保護のための対策を進めなければならぬと思う。

このペンリレー、次回は加藤英彦さんをお願いします

両子山(720.5m)

(一〇月月例山行報告)

阿南 寿範

一〇月の「月例山行」は、私がリーダーで会員を集めて山へ出かけることになっている。

(一〇月最近(一年半ほど)月例山行は参加出来なくて、無沙汰気味である。したがって誰が参加してくれるのか、全く把握できていない状態である。(思い立ったら吉日と一〇月十一日実施した。)

今月、月例山行に参加する人は、今年十一月に迎える「支部創立五〇周年記念事業」の一環で行われた海外登山に参加しており、メンバーのほとんどがその登山に参加している。

編集部長の飯田さん(海外登山参加)から、出発二時間前に依頼を受けて、一〇月の会報に月例山行のもようを載せたいと電話が入った。『私としては大弱り』

一〇月はこれから農繁期でもあり、稲刈りの準備、後かたづけ等、土・日は私的なことで大忙し。このままズルズルするのは月が変わってしまふ。中野さんに協力をお願いしたが、中野さんも忙しい様子で一〇月一七日であれば都合がつくがということであった。仕方がない原稿書くとすると行って確かめてくるしかない。一人で

くことに決めた。しかし、やっぱ
り旅は道連れ、友を連れて行こう
と我が家のかみさんに一緒に行こ
うと持ちかけ、やっとの事で、一
緒に行ってもらうことにした。

一人で行くつもりであったので
「メンバにひやご飯と梅干し一個、
ナラズケ四切れ」を詰め出発準備
弁当を指さし、かみさんの一言
「なんなこれは？」

出発は、家内の用事を済ませ、
午前十一時三〇分、大田村廻りで
両子寺を目指す。両子寺より登り
は五〇分、往復で約二時間の山行
であるので、高速道路は使わず国
道一〇号を北に進む。市内大道バ
イパス抜け、別府、日出、山香、
太田町、途中別府市内で、昼飯お
よび、おやつの買い出し。

久しく国東の道进行することが無
かったのずいぶん道路が新しく
なり便利になっていことに驚く。
特に両子寺を中心とする周遊道路
はトンネルを貫き、とても快適な
ドライブコースなっている。

私は、いつも古い25,000分の1
の地図を持ち歩いているのだが、
この辺りに来ると全く意味をなさ
ない。何度が来たこの地、何とか
両子寺に着く。寺はタクシーで来
た観光客や小型マイクロバスで来
た客等がまばらにあり、紅葉には
少し早い寺の風景を楽しんでいた。
りである。

登山靴に履き替え山歩きの準備
を整えた。登山靴を履いている間
いつの間にか、かみさんはその辺
で見失った。寺は昔の雰囲気と、
どこか違うことに気づく。昔は寺



の建物の脇の沢沿いの道路を進入
し、すたこら登っていたものだが
そこには柵が張り巡らされており
通行不可能となっている。便所の
脇をうろうろしていると、かみさ
んを発見した。先にうろつていた
こともあり寺のことについてかな
り学習している様子で、寺に通ず
る階段の途中で「入場料」を払お
うと待っている。(二〇〇円/人)

寺の見学はもちろん、登山者も必
要である。入場料支払い後、数段
の階段を上ると、本堂正面に出る
右手の方向にお札売り場や土産物
屋があり、その軒の下を通り道路
に出る。登山道はここからが始ま
りである。

道は、頂上までアスファルト舗
装とコンクリート舗装で幅は三m
完璧な整備がされている。(そこ
らの舗装道より状態よし)登山靴
の登山ではもったいない。普通の

靴で十分登れる。道はほぼ直線で、
最急勾配は二五%近くあると思わ
れる。頂上付近になるといつそう
急になり、斜め歩きしないと登れ
ない程急な状態である。



五〇分ひたすら我慢状態で登る。
登山口から頂上までは全て杉の二
次林である。稜線に出ると五分
の道標、ここからテレビ塔のある
処までも完全舗装である。そこか
ら上のテレビ塔まで三〇m。左手
に「二等三角点」が姿を見せる。

三角点に片手であいさつ。あいさ
つしたまま、したり落ちる汗、
メタボでは無いと思っていたが正
直に汗はやまず、その脇に
はコンクリート偽木製の展望台が
ある。

風を求めて展望台に登る。空は
いっぺんの雲ひとつない青空、国
東半島が一望出来る。今日は四国
も見える。今回かみさんが一緒に



ついてきたのは彼女にも多少の興
味のある山であるからだと思う。
「国東半島の山々には、昔、東京
より中村純二先生ご夫妻とご一緒
した記憶がある」幾度とご一緒し
たおかげで、お二人のお人柄に惹
かれて、我々も今こうしている。

時おり吹く秋風を二〇分ほど二
人で浴びる。
登り途中で出会ったバイク乗り
の皮ジャンのお兄ちゃんが上がつ
てきた。ちよつとそこまでのつも
りで登ったらしく、水ももってな
い状態、かみさんの上げたジュエ
スに大喜び！さすがに朝作った私
の弁当は見せられないと食べるの
を我慢した。お兄ちゃん曰く、別
府市在住で両子山は、国東半島ツ
ーリングする際いつも見ている山
であり、あこがれだったとか？
機会があれば一度登ってみようと
思っていたらしく、登った事に対

して大変喜んでくれていた。
下山、来た道を一目山に下る。
急坂で前向きに下ると転げ落ちそ
うで、登りと同じくジクザグに下
る。登り五〇分、下り三〇分で寺
に着く。おかみさんとバイクのお
兄ちゃんはサプライズで奥の院廻
りを下った。私は、後から下りた
ので直接寺に着いた。

帰路は、安岐町(三浦梅園邸)
から、オレンジロード(農免道
路)を通り、杵築市に出る。杵築
市より国道二一三号号を我が家
に向かった。

一〇月の月例山行は、私の勝手
で参加者なしの登山であったが、
このような機会でも無いと、最近
は足が山に向かわず、チャンス
を逃してしまふ。体力作りを重点に
今後はいつでも山へ出かけられる
ようにしておきたい。

〔コースタイム〕

自宅11:00 → 13:20 両子寺13:25
→ 14:18 両子山山頂14:45 → 15:13
両子寺15:21 → 17:50 自宅

走行距離(往) 88.65km 大田

町経由

走行距離(復) 74.9km 安岐

・杵築経由

**キリマンジャロ登山
とサファリーの旅①**

星子貞夫

期日：2009.12.22~2010.01.01
天候：晴

メンバー：星子貞夫、下川幸一、宮崎すみえ

山城・・キリマンジャロ

2010年元旦 午前零時、突然誰かの携帯電話から音楽が鳴り響いた。此処はキリマンジャロ・ロングアイ・ルートのスクール・ハット (School) である。アタックに向けて準備している時である。

新年の始まりを知らせる仕掛けだ。皆が Happy new year.

と言って互いに抱き合う。出発前の張りつめた緊張がほぐれ、新年を祝う喜びの笑いど歓声が狭い小屋中にひびく。

スクール・ハットは岩壁を背にして僅かな平地に建っている。収容人員30名の小屋と管理棟、トイレのある無人の小屋である。

肌寒く張りつめた空気のなか支度をして外に出て、山頂に向けて動き出す。期待と不安が行き交う気持ちを抑え、大きく息を吐き出す。出発の緊張の一時である。

満月の月光の霽に濡れたキリマンジャロの火山大地の肌は燠銀色に輝き、人影だけが黒く動いている。

サブ・ガイドのジャスティンが先頭にチーフ・ガイドのゼベダヨが最後につき我々三人をはさんでヘッド・ライトで足元だけを見つめながら歩きました。



暫らくは歩きやすい岩場の登行が続く。4,850m付近でS氏が疲労

を感じ、ガイドに荷物を預けてしばらく登行したが、足元が不安定となり引き返す。やがて傾斜が緩やかになり足元が砂利状になると、ギボ・ハットから続くノルマル・ルートとの合流点である。時間は午前三時をまわっている。

さらに一時間くらい歩きようやく空腹を感じ大地に座り込んで朝もらった菓子などを食べ、ウインド・ブレーカーのカップを着る。快晴の空に陽光の兆しは無いが月も山影に入り、暗くなった南の空に突然明るく大きなオリオン座が煌々と輝いている。手が届きそうである。

見上げると頂上は見えているが遅々として進まない。やがて水平線に夜明けの兆しが表れ地平線を黄金色に染めて太陽が顔を出す。永遠に続くかと思われるジグザグの登りを幾度も繰り返し8時30分にギルマンズ・ポイントの岩に到着する。

広大なカルデラが目の前に広がり、はるかかなたにウフル・ピークの氷河が見える。全身綿のように疲労している。

空腹と疲労で暫らく座り込み、互いに記念写真を撮ってウフル・ピークを断念し、キボ・ハットに向けて下山する。喜びもなかばの気持ちである。

ナイロビに着く。今日はクリスマス・イブである。



ナイロビ市内はまれにみる大渋滞で身動きが取れない。大木の街路樹が数か所で倒れて道路を塞ぎ、退社時間と重なったため。ナイロビのジョモ・ケニアツタ国際空港を15時頃迎えの車で出発したが、パン・アフリック・ホテル (Pana Hotel) に着いた時はすかり日も暮れてしまった。

ホテルでエージェントの河上さんと会い、今回の旅行、サファリ、登山に関するブリーフィングをして、先々のホテルや移動車のインボイスを受け取る。

ホテルのレストランは楽団の演奏もありクリスマス一色である。
12月23日 8時専用車でアンボセリ国立公園に向かって出発する。車は中古の日本車を屋根が持ち上がるように改造したものである。

ドライバーの名はアントニー。



登山が始まるまでの4日間毎日サファリーで世話になった。



アンボセリ国立公園の宿泊施設はツリム・アンボセリの宿泊施設はツ

インのベッドと浴室、トイレを備えた二重屋根付きの大型テントである。同じ作りのテント設備が集まるテント村である。食堂は壁無し、の屋根だけの建物である。三食ともバイキングで気に入ったものだけを好きなだけ食べられるのでとても良い。果物やジュースが豊富であった。



サファリーは動物が行動する朝と夕に行う。広い公園のなかに周遊道路が作られており、動物の姿を求めてオープンルーフ式小型マインクロで走る。車同士互いに無縁連絡するので、ライオン等のいる所では教台が集まってくる。大型動物では象とバッファロで

ある。この大群は圧巻である。ライオンは餌食になったバッファロが仰向けになり四つ足をばたつかせている光景にも遭遇する。



カンムリツルが優雅に餌を啄んでいる。ハイエナが背をまるめてうろついている。

12月25日 早朝まだ夜が明けぬ5時半にジープでバルン乗り場に行き、バルンサファリーをする。一度3500mまで上昇して雲に隠れたキリマンジャロの上部をみる。



バルンの上からマサイの部落が丸い輪になって転々とある。バーナーの爆発音の驚いたキリンが逃げていく。アカシヤの大木が大きく枝を広げている風情はアフリカのサバン

ナ独特の風景である。その下でシャンパンをあけ、朝食をする。なんと優雅なサバイバルであることか。人も風景も風も木々もそして動物達までもやさしく肌にかんじる。

12月26日 マサイ部落の見学に行く。一人3000の御礼金を渡すと、部落の中や家屋の中まで撮影がゆ



るされる。部落絵出の歓迎を受け、日本から持参した学用品をプレゼントする。見学が終わると建物の裏に用意した土産品売り場に案内されて、民芸品の押し売りである。貨幣経済は貧しいものを更に追い込む。彼らの履物を見た。男も女も成

年はすべて同じ履物をはいている。古タイヤを切って紐をつけたサンダルである。このアフリカのサバンナに古タイヤがある訳もない。聞けばすべて中国製と言う。



も中国人のしたたかさを見せられる。それも古タイヤを切ったサンダルを作り、外国に輸出するなどと言うコ

ンセプトは日本人には無い。日本人は完べきを期すが中国、韓国の人は相手国の実情に合わせて省スペースのものを安く作って売

12月27日 三日間のサファリーを終えていよいよキリマンジャロ登山にむかう日である。飛行機の中が寒くて風邪をひき咳が出て心配であったが、風邪薬を飲み少し快方にむかっている。アントニーの運転ですべての荷物を車に積み、登山口の国境の町ロイトキトツクに移動する。途中のトイレ休憩でちいさな画廊に立ち寄りアフリカ独特の絵を鑑賞する。画廊と言ってもすべては観光客目当ての商売であり、しつこく迫られる。サバンナを離れて人家のある所に来ると沿道はトウモロコシ畑が

続いている。8時30分に キボ・スロープ・コテツジに着く。ここはまだケニヤである。登山手配はキボ・スロープ・サファリー(標 Mtibo Slopes Safari's LTD)で行っている。下山後ナイロビのホテルまでのすべての行程がセットされている。

キボ・スロープ・コテツジの主はオーストリア人のトニーである。キリマンジャロにも数回登り、ロイトキトツク・ルートの開拓に尽くした人物である。午後ブリーフィングをし、山の事などを聞く。チーフ・ガイドの名はゼベダヨと言う。

ここで登山に不要な荷物を預け、個人装備^{80%}を用意されたポーター用のグリーン^{20%}の完全防水バッグにパッキングする。

預けた荷物は下山口のナカラ・ホテルで受け取れる。今回我々はポーター用にザックを用意したが不要であった。

12月28日 9時にトレール・ヘッッドのナレモル・ゲート(1990m)につく。此処の スノー・キャップ・コテツジには登山に同行するチーフ・ガイドのセベダヨ(60才)、サブ・ガイドのジャスティン(44才)コックのジャクソン(28才)が待っていた。8名のポーター達は周囲にたむろしている。初対面の挨拶をしていよいよ登山が始まる。今回のルートはロンガイ・ルート、ナレモル・ルート、ロイトク・ルートとしてダイレクト



・ルートと言う。すべて同じルートの名である。実にややこしい。今回はロンガイ・ルートと呼ぶこ

とにした。

記念写真を撮りスタートする。道は緩やかな登りである。休むことなく時間歩いてキャンプに着いたが、時間はひどい雨のなかであった。夕方雨は上がったが結局この後ナイロビを離れるまで毎日雨に会うことになる。

第一キャンプ地はセキンバ・キャンプ(2700m)といい、ここがキリマンジャロ国立公園のゲートである。管理棟がありレンジャーが駐在していて登山者は皆登山台帳に記帳する義務がある。

夜は満点の星空である。
(以下・次号に続く)

私の無名山ガイドブック43

飯田勝之

里山の稜線歩き

(その⑭)

小鹿山(727.6m)

別府市の景観を形成する背後の山並みは、南の高崎山から始まり鶴見岳北尾根の終点、十文字原

で終わるが、その中間で見落とせないピークが市街地の真後ろにある小鹿山である。この山で孕んだ雌鹿を射た狩人が、後悔して発心、仏門に入って聖人となる伝説がある。有名な草堂・行願寺を建てた行円とか。

小鹿山の頂に立つためには車で行けば山頂直下にある少年自然の家から登れば、最短では二〇分足らず登れるが、ここではひとつ別府の市街地から歩いて登ることにしよう。

JR別府駅で下車し、ラクテンチまでバスで行っても良いが、このコースを選んだついでに、駅から歩くのがよい。駅の西口を出たら街中を歩いてラクテンチ下まで約三〇分、ケーブルカーの乗り場の横からスキの林の中のジグザグのコンクリート舗装の小道を登って約二〇分で乙原に着く。市道に出たら右にとり、約五〇m先の「乙原の滝道入口」の標識に従って左に小道を上がる。清らかな流れの井路に沿ってほとんど平坦な細いコンクリート舗装が続く。やがて、頭上に高い高速道路の橋の下を通ると登り坂となり、乙原から約二〇分で滝の入り口に着く。ここから往復一〇分足らずで雄滝、雌滝2本の滝の下に行けるので、ついでに訪れることをすすめる。

ここから先は道も荒れて傾斜も急になり、本格的な山道となる。左下に聞こえていた滝の音が途絶えると道が平坦になり、明るいカヤ野の中を行くと、砂防ダムの少

し上で酒沢を渡り林道に出る。左右どちらをとっても良いが、右にとった方がずっと林道歩きで楽である。途切れ途切れにコンクリート舗装された林道は、大きくカーブしながら登っていく。頭上には十数年前までロープウェイが運転されていて、ハイカーとゴンドラ内のお客とが手を振り合う風景も見られたが、現在は運転停止してワイヤーだけが残っている。

林道との出会いから約二〇分で別府市の裏山を横に貫く榎下林道との出会いの三叉路に出る。右に行けば約一時間半の林道歩きで志高湖に着くことができる。

左に行くとも一〇mほど先で道が左カーブし、左下から小さな山道が登ってきている。下の林道との出会いで左にとった場合ここに出る。カーブの少し先の右側に鳥獣保護区の立て札のあるところから谷に入る。すぐ上に砂防ダムがあり、この谷を登る。以前は小学生でもハイキングで登れた道だが、最近はやがど利用者がなく、風倒木や谷の流水などで荒れてしまっている。かつて別府方面からのハイカーが盛んに利用していた面影は今も谷沿いにわずかに残っている。

風倒木を避けたり、崩壊地を高く巻きしたりして、目印や踏み跡を頼りにスギ林の中をジグザグ登っていくと、榎下林道の入り口から約三〇分ほどでスギ林が終わり天然林となる。前方にスカイラインが見えて来ると稜線は近く、笹の

中の小道を分けて進むとひよっこりと明るい防火帯に出る。
(船原峠付近から志高湖と由布岳)



ここが船原峠で、下方に志高湖の湖面が見え、その背後に由布岳、前方に雨乞岳の稜線とその向こうに九重山群、更に遠くには祖母、傾連山も望むことができる。真っ直ぐ下れば昭和三年の全国植樹祭会場の記念植樹林を右に見て約二〇分で志高湖畔に着く。

広い防火帯を左に進むと、少し先のカーブを曲がると稜線上に直ぐ近く、小鹿山が見えてくる。広い明るい防火帯の上を、ゆっくりとアップダウンしながら右手の展望を楽しみつつ稜線歩きが続く。やがて急な登りとなり、雨上がりなどでは滑りやすい急斜面を、足下を注意しながら直登すると、登り着いたところが小鹿山山頂で

ある。防火帯の東の樹林の中に三等三角点があり、かつては高い木に囲まれて展望がなかった、近年樹木が伐採されて別府市街地や高崎山方面を見ることが出来る。下方から高速道路の音も聞こえてくる。

下山は防火帯をそのまま進んで少年自然の家を下り、後は林の中の山道を西に進み、神楽女の集落を過ぎ、神楽女湖を左に見て舗装道路を行けばやがて志高湖畔である。志高湖からは別府または由布院行きのバスがある。



小鹿山

参考タイム
別府駅～〇…三〇〇ラクテンチ下
駅～〇…二〇〇乙原～〇…二〇〇
乙原滝分岐～〇…四〇〇榎下林
道出合い～一…〇〇〇船原峠～
〇…五〇〇小鹿山～〇…一五〇少年

自然の家～〇…二五〇神楽女湖
〇…三〇〇志高湖

地形図：二五、〇〇〇分の「別府西部」

支部報編集担当者 会議に出席して

去る九月五日(日)、東京都多摩市で開かれた支部報編集者会議に出席した。この会議は、多摩市で開かれた全国支部懇談会のついでに開かれたもので、全国各支部の支部報編集担当者が始めて一堂に会する会議である。

午後一時から多摩センターにある京王プラザ多摩で開かれ、会には全国各支部から担当者や支部関係者約三〇名が出席した。はじめに本部の会報編集責任者の神長氏が「編集者会議は支部活性化の重要な柱である「支部報」について情報交換するとともに、今後のあり方を考える場にした」とあいさつがあり、時間的な制約があったため、出席した参加各支部の担当者が支部報発行の状況と、編集上の問題・課題等について順次報告があった。

共通の課題は、原稿や記事が思

うように集まらないことだ。「山の登り、登ったことを書く」とこの基本を交流し、情報交換することが支部活性化につながるという意見が共通だった。

そのあと、本部の神崎副会長がまとめを行った。その要旨は「今日、日本山岳会にとつては主に三つの大きな課題がある。それは①高齢化に対応する会の活性化。②公益法人としての活動の充実。③支部の活性化である。このなかで支部の活性化を進める上で欠かすことのできないものに支部報の位置づけがある。支部の情報流通が組織のつながりを深め、会員相互のつながりと支部の活性化に活かされるものと思われる」などであった。最後に支部報編集者の今後の連携や情報交換の必要性が確認された。

(飯田勝之)

支部活性化 会員集会

多摩市で開かれた全国支部懇談会では、支部報編集担当者会議に引き続き、支部活性化会員集会も開かれてこれに出席した。

午後二時からの開会で、一〇〇

人以上が出席したこの会議では最初に、全国でもっとも支部活動が活発に行われているという広島支部の兼森総務委員長が発表して「第一ステップで、県岳連などで活動している人を一本釣りなど、人材確保で基盤づくりにつとめた。第二ステップで支部組織の編成、特に地元「中国新聞」と提携し、登山教室を開いて、講座修了生を勧誘した。組織作りは人づくりで、小学生を対象とした自然教室や、中・高校生を対象とした登山教室も具体化して、今後いっそうジュニアユース世代の育成に力を入れたい」と語った。

このあと、この集会に寄せられたレポートをもとに、江花福島支部会長、諏訪千葉支部事務局長、小清水多摩支部会員、早田岐阜支部長、重廣関西支部長、前川石川支部事務局長、工藤熊本支部長、岡本宮崎副支部長の八人からそれぞれの支部活性化の考え方や提案などがなされた。このあと、フリーディスカッションで、活発な意見が飛び交った。最後に、座長を務めた石橋支部活性化チームリーダーが「支部活性化は会員のみんなの力が原動力だ。会員の一人ひとりの活動をつなぎ合わせて大きな活動力としていこう」と締めくくった。

(飯田勝之)

お知らせ

一 一月月例山行のご案内
月日：一月七日(日)
目的地：鶴見岳(374.5m)
(大分川の源流部)
出 発：一月七日(日)
午前八時大分駅前出発
※ 五〇周年記念行事の記念山行

一 二月月例山行のご案内
月日：二月二六日(日)
目的地：井原山・金山
福岡県・佐賀県、室見川・嘉瀬川の源流部)
出 発：二月二六日(日)
午前五時〇〇分サニー出発

一 一月月例山行のご案内
月日：一月二三日(日)
目的地：尾崎山(宮崎県、耳川、小丸川の源流部)
出 発：一月二三日(日)
午前五時〇〇分サニー出発

一 二月月例山行のご案内
月日：二月二〇日(日)、
目的地：久住山(大野川、大分川、筑後川の源流の峰)
出 発：二月二〇日

午前七時サニー出発。
牧ノ戸峠九時発

忘年山行と忘年会 のご案内

今年もまた重廣恒夫
さんと一緒に

毎年恒例となつています重廣恒夫さん(関西支部長)と一緒に忘年山行と忘年会は、今年は次のとうり実施します。会員・会友のみなん、年に一度のみんなそろつての交歓会です。一緒に楽しみましょう。

月日：十二月一日(土)

一・二日(日)

ここは何処?



・この写真は何処から何処を撮ったものでしょう?

・お分かの方は事務局まで、はがきでお知らせ下さい。当たった方には記念品をさし上げます。(二名まで、正解多数の場合は抽選します。)
・締め切り
一二月末日
前回の正解は釈迦岳から御前岳(権現岳)石割山方面を撮ったものでした。

山行：

十一日大分↓竹田・神原→八丁越→大障子・ここで前障子縦走組B班とUターン組A班に分かれる。B班は前障子→林道(A班の車を林道に回す)
十二日緩木神社→越敷岳→緩木岳→緩木神社

集合：

十一日 午前七時大分発(八時

玉来の丸食駐車場集合または九時神原・穴森社入り口集合)

十二日 一・二日のみ参加の方、竹田市・九重野・緩木神社(大規模林道交差点) 午前八時集合

忘年会と宿泊場所：竹田市大字神原、祖母山麓体験交流施設『あ祖母学舎』(姥岳小学校あと) TEL0974 (67) 2121

会費：七、〇〇〇円(一泊二食、宴会、弁当込み)当日徴収

出欠：出欠については、

二日間全日程参加、一日山行のみ参加、一日山行と忘年会まで参加、一日の忘年会のみ参加、一の忘年会と二日の山行まで参加、二日の山行のみ参加、の別に、加藤までご連絡下さい。

問い合わせ・連絡・申込み先
加藤英彦：

〇九七(五四三)〇三三三
〇九〇一三六〇七七九〇三

※申し込み：一二月五日
まで

後記

〇 目前に迫り来る五〇周年記念のメイン行事。不在中に、残ったスタッフにかけた負担を取り戻そうと、行事準備に気持ちは焦るし、遅れている支部報の発行も急ごうと、気持ちは焦る。

・、しかし、何しろネパール(五〇周年記念海外登山参加)から帰ったあとの、時差ボケ・。

〇 ネパールに発つ前は、まだ残暑の残る秋の始まりで、ヒグラシが鳴いていたのに、二〇日たつて帰って見たらもう晩秋の寒さで、夜の虫の声も弱々しい。時差ボケ、プラス季節ボケ。

〇 出発前に今号の発行準備を半ば手がけていたが、帰ったら、あれや、これやと気が散って、手がかさず、ついでに延び延びになった今号の発行です。

〇 いつものことですが、もたもたしているうちに時間だけ過ぎていく。時間の過ぎるのを早く感じるほど年をとっている証拠と言うが、感覚だけじゃなく、こなす仕事量もやっぱり、当然ながらトロイ・。

〇 一年の締めくくりを忘年会で、山の仲間みんなと、楽しく登り、楽しく飲むひとときを味わいましょう。五〇周年記念の行事も振り返ってみて・。

(K・I)

日本山岳会東九州支部報 51号

2010年(平成22年)10月25日(月)

発行者 梅木秀徳

編集者 飯田勝之

発行所 〒870-0021

大分市府内町1-3-20

サニースポーツ内 西孝子方

TEL・FAX 097-532-0926

題字 (故)佐藤正八